

日本福祉心理士会

ニューズレター (No. 8)



特集1:「福祉心理学とは?—会員の実践・研究から(7)—」

福祉心理学会は2002年に準備委員会が発足し、2003年に第1回の大会が開催されました。現在、15年目を迎えるまだまだ新しい学会です。そのため、学会の基盤とする「福祉心理学」という学問体系についても定義、理念、理論、対象、領域などは十分に定まっておらず、発展途上にあります。

「福祉心理士」は日本福祉心理学会が認定する資格であり、福祉サービスを利用する人のアセスメントを行ったり、サービス利用者やその家族、そして、そこで働く職員の福祉心理相談・支援を行ったりするうえで専門家として求められる基礎学力と技能を修得していると本学会が認定した人のことです(HP)。しかし、その実際は十分に周知されているわけではありません。

ニューズレター委員会では、会員の実践・研究から発展途上にある福祉心理学や福祉心理士について浮き彫りにしようとして特集を企画しました。前号では3名の福祉心理学会会員に、東日本大震災に関する心理的援助、学校領域におけるソーシャルワーク、学校領域における心理的支援について執筆してもらいました。

本号は、富樫ひとみ先生からは公認心理師のカリキュラムにも含まれるようになった福祉心理学の定義についてご自身のお考えをまとめていただきました。兒玉宣昭先生には発達障害領域におけるピアサポートについて具体的な取り組みも含めてご紹介いただきました。辻康子先生にはスクールソーシャルワークに関する取り組みや独自の視点から論評をいただきました。大原天青先生には Practitioner-Researcher Model と福祉心理学について紹介いただきました。それぞれ福祉と心理のつながりについて、研究・実践を通して紹介してくださっています。ぜひ、ご覧ください。

次号以降もこの企画を継続していくことを考えています。みなさまからの積極的なご意見もお待ちしております。

私の考える福祉心理学

富樫ひとみ(茨城キリスト教大学教員)

○福祉心理学の学問的視点

私は大学で社会福祉士養成に携わっていることから、福祉実践などを研究対象にしたりしています。福祉実践では心理学的知見の活用が欠かせず福祉実践と心理学は密接な関係があると考えています。

社会福祉実践と心理学は密接な関係があることに確信は持っているものの、その一方で新たな学問としての福祉心理学はどのような学問なのかという問題は、「福祉心理士」が誕生してからもずっと明快な答えを出せずにいました。しかし、いよいよ心理職の国家資

格である公認心理師が誕生し、その養成課程に「福祉心理学」が組み込まれ、社会的にも福祉心理学という学問が認知を得ました。これを契機に、「福祉心理学とはどのような学問か」という問題に対して、自身の考えを整理しました。自身の考えを発表する機会を与えたいということに感謝いたします。

○「福祉」の意味

福祉心理学の「福祉」という言葉の意味は、「福」も「祉」も「幸せ」を意味します。そのため、「福祉心理学」は幸せに関わる心理学という

こととなりますが、幸せに関わる心理学というだけでは研究対象や研究領域が広がり過ぎて、学問独自の視点や性格があいまいになります。学問として成立するには、学問独自の視点や性格を明確にする必要があるため、「福祉」という用語の使われ方から福祉心理学の視点や性格を考えていきます。

私たちが「福祉」という言葉を使う時、単に「幸せ」を意味するということよりも「社会福祉」を意味していることが多いと思います。すなわち、「福祉」の背景には「社会福祉」という概念が存在するのです。この「社会福祉」という用語も、実は多義的な用語で、この用語を使う人によってその意味するところが異なるのが現状です。

寺田(2005)は「社会福祉」という概念の意味するところを整理しています。その整理を参考して、私は「社会福祉」の概念を以下の5つのレベルに大別しました(富樫:2018)。

第1レベル:実際の経済的な生活困窮者や障がい者、高齢者、児童などの社会的弱者等の生活上の困難を抱えている者に対する施策等。

第2レベル:第1段階の概念に社会保障制度や福祉関連施策(社会保険制度や公衆衛生など)を含み、対象者は国民一般。

第3レベル:第2段階の概念に教育や雇用、住宅など社会政策を含み、対象者は国民一般。

第4レベル:実態的な施策・制度にとどまらず国民一人ひとりが幸福な状態の理想社会を目指すという理念的な概念で、対象者は国民一般。

第5レベルでは、制度・政策とは無関係に、社会全体の幸福や繁

栄を意味する。

○福祉心理学における「福祉」概念のレベル

第5レベル概念は、言葉の意味としての概念です。私は、実践的学問としての社会福祉学では、このレベルの概念を「社会福祉」に含めるのは難しいと考えます。

第4レベル概念は、理想的福祉社会の理念形です。第1～3レベル概念における実態的な制度・政策は福祉社会の理念形を目標に策定されていくものです。したがって、第1～3レベル概念には、その根底に第4レベル概念があると考えます。

以上から、私は、福祉心理学における「福祉」とは「国民一般を対象にした、理念形の福祉社会における国民一人ひとりの幸福な状態」と考えます。

○福祉心理士と臨床心理士・社会福祉士の相違点

福祉心理士は対人援助を行う専門職であるところ、近接専門職に臨床心理士や社会福祉士があります。これらの類似点や相違点を考えていきます。

3者の類似点は、環境の活用・整備と心理的援助を軸に対人支援を行うことです。相違点は、3者によってそれぞれの程度が異なること及び対象者です。

臨床心理士の援助対象者は問題行動と認められる行動をとる個人で、援助方法は心理療法です。したがって、環境の活用・整備は

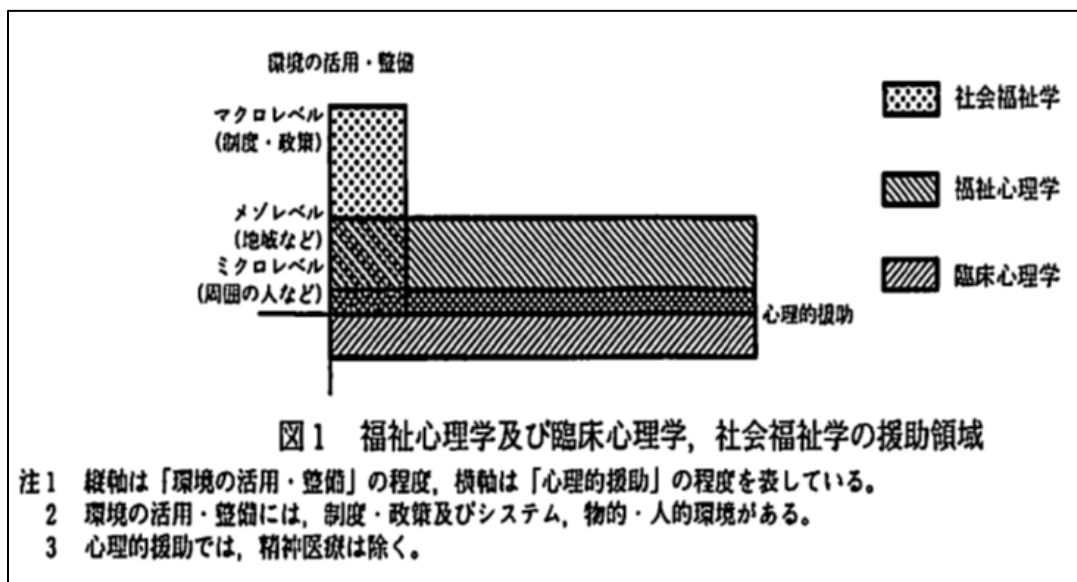


図1. 出典: 富樫ひとみ(2018)「福祉心理学の定義と研究領域」茨城キリスト教大学紀要 52, 89 頁。

ほとんど行われません。社会福祉士の援助対象は生活課題を抱える個人と環境です。援助の方法は社会資源を活用しながら対象者の自己決定支援や自己実現支援などの心理的支援を行います。また、制度・政策や物的・人的な環境の改善なども行います。

福祉心理学における援助対象や援助方法は、確立されているとは言いがたいのが現状です。援助対象者は前述したとおり国民一般となりますが、現時点では第1レベルにおける対象者への心理療法的アプローチで援助を行う事例が多数報告されています(図1)。また、援助は社会福祉士同様チームアプローチや環境への働きかけもなされるでしょうが、社会福祉学的アプローチのように制度・政策への働きかけは含まないと考えます。

[参考文献]

・寺田貴美代(2005)『「広義の社会福祉」に関する概念整理』清和大学短期大学部 33, pp. 33-45。

・富樫ひとみ(2018)「福祉心理学の定義と研究領域」茨城キリスト教大学紀要 52, pp.83~91。

○富樫ひとみ先生のプロフィール

専門領域: 高齢者の社会関係と福祉、障害者福祉、コミュニケーションと深層心理

紹介: 福祉心理士会事務局を務めている富樫ひとみです。茨城キリスト教大学で社会福祉士養成に携わっています。高齢者のボランティアなどを研究していましたが、大学内で障がい学生への修学支援活動に携わるようになってからは、若者や障がい者によるボランティアなども研究しています。

メール: ht-togashi@icc.ac.jp

日本福祉心理学会の一会員としての活動

児玉宣昭(一般社団法人発達・精神サポートネットワーク、東部人間福祉機構(認定成年後見人事務所))

○発達障害とピアサポートについて

私の専門の領域は、ピアサポート、というものになります。ピアサポートは学校現場での事象を取り上げることが多いのですが、私は成人期発達障害を専門としています。

発達障害でピアサポート?というあまり聞きなれない領域を専門にしています。そもそも発達心理学で考えると、発達障害でピアサポートは成り立つのか?という素朴な疑問が起きてくると思います。たしかに、こころの理論、などでは発達障害者の独特の世界観があり、想像性の欠如など、発達障害者にピアサポートが可能なのか?という疑問が出てくるのは心理学の専門家として当たり前のことだと思います。しかし、精神障害のピアサポート、という考え方も一昔前までは、あまり論じられることのない領域だったと思います。精神障害者にピアサポートが可能なのか?という素朴な疑問は心理学の専門家としては当たり前に持つと思うと思われます。ちなみにピアサポートでは、すべての事象にピアサポートは当てはまる、とされているので精神障害者でも、発達障害者でも理論上はピアサポートは可能であると考えられると思います。ピアサポートと心理学の関係性ですが、関連領域に日本学校教育相談学会があり、そこでは、ガイダンスカウンセラーや、学校カウンセラーの検定制度があり、公認心理師との関連性があります。

私が日本福祉心理学会に加入したのは10年以上前のことで、その時に考えていたことは、社会福祉学と心理学の中間領域としての福祉心理学とはどのようなものであるか?という疑問だったのです。福祉心理学という領域は今でこそ国資格である公認心理師の試験の中の25分野の1つとされてしっかりと制度上も位置付けられていますが、残念ながら学問としては確立している領域とは言い難い面もあると思います。私は入会当初の考えから少しずれて心理学や社会福祉学中間領域とも言える、ピアサポートに関心が移ってしまったのですが、福祉心理学に対する期待と熱意は入会当初と変わっていないと思います。福祉心理学が学問として確立した分野になって欲しいと切に思いますし、それがクライアントの自己実現にきつと役立つであろうと期待もしています。

さて、話は変わりますが私のフィールドの話を見せて頂きたいと思います。一般社団法人発達・精神サポートネットワークでは、発達障害当事者によるピアサポートに力を入れております。設立当初は障害者総合支援法に基づく、就労継続支援B型と共同生活援助を運営していました。今現在では共同生活援助と居場所そしてカフェを運営しています。共同生活援助の支援員も発達障害当事者ですし、カフェの店員も発達障害当事者で運営しています。支援員が発達障害当事者であることは、クライアントやお客様と共通の悩みを分かち合えたり、発達障害当事者として色々な制

度や支援を受けて来た経験を時に支援に活かしたり、またクライアントなどから教わったりと、双方にとって刺激となり、また、対等な関係としての支援員という意味において大変意義深いものがあると思います。定型発達への支援員による支援は、当事者はこういう支援を望んでいるであろう、という憶測を基に支援をしていると思われ、良質な支援を提供するためには、当事者の意見を尊重し自己決定を促すことが大切であると、一般的には考えられていると思われ、しかし、定型発達への支援員が支援をすることで意図はしていないものの、支援員という権力によって本来当事者が望んでいない支援を押し付け気味になり結果としてパワーレス状態に陥ったり、定型発達への支援員の立てた支援計画に載らない支援を希望する当事者を処遇困難事例として処理してしまう、などの弊害が出てくる可能性があると思います。発達障害者の困りごとは発達障害当事者の方が分かり易く、いわゆる「腑に落ちる」という支援は当事者による支援の方がよりし易い関係にあるともいえると思います。

精神障害者のピアサポートでは、精神障害者同士であるからこそ出来る支援がある、とされています。発達障害者でも同じようなことが言えると私は仮説を立てています。

また、以前はカフェ内で、発達障害の当事者研究、という新しい領域を試みていた時期もあります。ちなみにこちらの会は今は、とある大学の研究室で行われています。私も以前はお手伝いをさせて頂いておりました。

発達障害者のピアサポートという領域はまだ歴史が浅く、研究途上なので誤解も多くなかなか理解していただけない部分もあるかと思っています。新しい試みはどの時代であっても理解されるまでは時間がかかると思います。それはピアサポートだけでなく福祉心理学も同様であると思います。

私はこれからも福祉心理学がクライアントの自己実現に役に立つであろうことを期待して一会員として自己研鑽をしていきたいと思っています。

○福祉心理学・福祉心理士について

福祉心理学についての私の考えですが、日本福祉心理学会に加入しているものの、浅はかな知識しかない私にとっては学会の諸先輩方とは違う意見を言ってしまうかもしれないことをお赦し下さい。心理学と社会福祉学の中間領域である福祉心理学は、まだ学問としては歴史が浅く、確立した領域とはいえない面もあると思います。社会福祉学が学問として確立する過程においては、心理学の確立と関係があるとされています。双方の学問は、専門性を増すにつれて距離を持つようになってきておりますが、社会福祉学と心理学の目指すものは、クライアントの自己実現、であり、双方の立場が違うものの目的とするものの共通点は多いと思います。「福祉心理士」について私の考えですが、昨今の学問の流れとして学際的な視点が大切、とされていますのでそれを客観的に分かり易くする、という意味で「福祉心理士」という資格の付与は意味があると思います。時代の流れですが公認心理師という国家資格が出来ましたので、公認心理師有資格者の一領域としての福祉心理学を専門とする、という意味で「福祉心理士」という資格が心理学ワールドの中に位置づけられると大変嬉しいと個人的には考えております。

○兒玉宣昭先生のプロフィール

専門:ピアサポート

資格:福祉心理士・認定心理士・精神保健福祉士・社会福祉士
経歴:東京福祉大学社会福祉学部社会福祉学科福祉心理専攻卒業

紹介:普段は一般社団法人発達・精神サポートネットワークのボランティアスタッフと、東部入間福祉機構(後見人事務所)の相談員をさせて頂いています。

メール:qqz4zvg9@abeam.ocn.ne.jp

福祉と教育 —福祉心理学「ASD」の現実と近未来—

辻 康子(京都府教育委員会 SSW (保・幼・小・中学校))

○教育における社会福祉士(SSW)・福祉心理士の役割

筆者は「子どもの権利に関する条約第三条、子どもの最善の利益」を最高の到達点に置きつつ、

「義務教育のなかで、まなびと心身の発達と知識と社会スキルの向上、生きていくしなやかな力が育つことを目指し将来的には進路実現と自立へつながること」を大切にし、チーム学校として文部科学省のSSW事業として、2008年から京都府教育委員会で仕事をしています。

基本的根拠は「社会福祉の専門的な知識技術を活用し、問題を抱えた児童生徒を取り巻く環境に働きかけ、家庭、学校、地域の関係機関をつなぎ、児童生徒の悩みや抱えている問題の解決に向けて支援する」専門家です。SSWは課題への支援・障害を持つ児童・生徒への丁寧な関りと支援、担当教師の困難、また保護者の困難、彼らは何を求め、どのような社会資源を必要としているのか、生物・心理・社会モデルの視点を重視し見立て・手立て・アプローチをします。

教育における困難や問題を解決に導いていく社会資源は生活保護関係、医療、保健所、適応指導教室、子育て支援課、児童相談所、警察、特別支援学校や要保護児童地域対策協議会などと連携を持つことが大切です。

課題解決のため学校との間にSSWが存在し学校、子ども、保護者、地域、関連機関からの情報を丁寧に分析し見立て、そして手立てを模索します。手立てにつながるためのアセスメント・見立ての大切さには次のような事項が含まれています。彼らの姿からは、①「どのような行動にも理由がある」、②幼少期の重要な情報(どんな背景があり、どんな子どもだったか)、③彼らに「何が起きているのか」を分析して、有効な対応を工夫していく。④彼らは「困り感はあるのか、ないのか、気づいているか、いないか等」も重視します。アセスメントは情報を多角的に「収集」して、系統立てて「分析」していきます。③④は心理士的分析も必要です。

○現実と近未来は・・・

以上のような視点を持ちつつ、例えば、「子どもが誕生した時点では非常に喜び、愛情を持って子育てをしていたものの、小学校となり、教室で落ち着かない、集中できない状態となったASDのA君をもつ母」に関わるとき、福祉・教育的な視点にたち課題解決に導いていくことが大事です。

A君が発達の特性があると考えたとき、「学校に登校していることをStrengthとして評価し、教室から出ないこともほめる。さらに保護者には彼を学校に押し出してもらっていることに感謝すること」を考慮に入れた見立てをしきまします。さらに家庭内では両親が仲良くA君が安心した生活ができていくことが心身の成長につながっていることを評価します。継続的な支援と見守りが様々な問題を未然に防止できることにつながっているのです。なぜなら、中期・長期支援を考慮したとき、その子の発達の特性(ASD)を熟知し、丁寧な支援と対策が子どもを成長させていることに気づき、学校は彼らの成長を喜びほっと安心します。

しかし、3年生頃になると「言うことを聞かない、大騒ぎをする、かんしゃくを起こす、怒って暴れる」等母親を困らせることばかり日常的にあり、徐々に社会的に落ち込み子育てが苦しくなってきた

す。母は相談する友人があまりないことに気づき落ち込んでいきます。

子供が嫌いではないが、子育てが面倒になっていき、小学校に入るところにゲームを覚え、スマホもうまく使いこなす我が子に、母は放っておいても大丈夫という安堵感を持ち始めます。子供はスマホゲームにはまり、4年生になると夜型となり朝起きにくくなってしまふことがあります。たまに学校を休む状態が始まり、次第に週2・3日休み、昼夜問わずゲームをする生活に至り、不登校へと落ち込むことになる事例もあります。こうなると家のなかでは、両親とのバトル、すなわち「ゲームを取り上げる、返せ」の非常に陰悪な日常となり、「父母はどうしたらいいのかわからない、子どもはゲームがしたい、ゲームがないと我慢できない」という状態になり、家族がバラバラになってしまうのです。

たった一つのゲームボーイ、タブレットなどによる「IT機器」なのに、人の心や人生をも狂わせてしまう「ところと戦うゲーム」となってしまうと筆者は考えています。でもそうなる前に多くの専門家や関係者を巻き込み「最善の利益」につながるようチームアプローチを行うことが必要だと思えます。

このように現代のIT化の一方でネットやゲームへの依存も懸念されます。こうした問題に対して、教師や親がどのようにとらえていくのか、支援していけるのか、充分寄り添って支えていけるのか、近未来いや、今を恐れています。手立てはあると信じています。

○福祉心理学・福祉心理士について

筆者は障害臨床学を学び、障害特に「ASD」に関する研究は現在も継続中です。今、教育機関で専門家として臨床の場で仕事をし、特別支援学級などで起こる様々な問題やトラブル、今後起こり得る課題など予防的に、解決に向けた手だてにつないでいます。

子ども達が「授業の邪魔をする、大声でしゃべる」この問題がなぜ起こるのか、なぜ起こったのかを「彼らの承認欲求的な言い分」も、様々な情報・角度から分析しアセスメントを行うためには社会福祉士・福祉心理士として臨床分野で活動するとき社会福祉学・福祉心理学は欠かせない基礎分野であると考えます。

子ども達には、普通も、障害の隔りもなく、当たり前学校生活を送る権利を持ち、さらには保護者もなくてはならない存在です。子どもの障害特性をしっかりと捉えつつ、教師・子どもとの信頼感や言葉かけ、相談援助を求められたとき適切な心理的アプローチのための自己研鑽と同時に倫理観を届けるために人と向き合えることへの努力は必須であろうと戒めています。

○辻 康子先生のプロフィール

専門:福祉・教育学研究「児童・青年期 発達障害 貧困 児童虐待 不登校 いじめ DV等」、医療・障害臨床学分野 社会福祉・精神保健福祉分野、教育関係者支援と講演 大学院学生指導

所属:京都府教育委員会 SSW (保・幼・小・中学校)、学校法人聖ヨゼフ学園看護専攻科講師、独立型社会福祉士代表「相談室 さらそうじゅ」併設「地域子どもの未来研究所」

メールアドレス: nv93sf@bmbabiglobe.ne.jp

Practitioner-Researcher Model: 実践と研究と教育～それぞれの狭間で～

大原 天青(国立武蔵野学院)

ここでは私の勤務する国立武蔵野学院について紹介をさせていただき、そこでの取り組みの考え方を整理したいと思います。これらによって、児童領域における福祉心理学について知っていただく機会になればと思います。

○百寿:国立武蔵野学院

「非行少年は幼少時家庭的愛情に恵まれず、悲惨な過去を持つものが多いので、先ず暖かい家庭的愛情を与える必要がある(国立武蔵野学院創立 70 年史)」

国立武蔵野学院は 2019 年 3 月 22 日で 100 周年を迎える厚生労働省所管の国立児童自立支援施設です。上記の理念に基づき感化院(1900 年～1993)にはじまり、少年教護院(1933～1947)、教護院(1947～1997)と名称を変え現在、児童福祉法 44 条に位置づけられた、「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、又は保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設」になります。

国立施設という点で非行・児童福祉領域の総合的なセンターとしての機能も併せ持っています。具体的には、入所機能に加えて全国にある 58 施設の児童自立支援施設における支援に寄与する取り組みを行うこと、児童自立支援専門員の他、児童福祉分野に従事する専門職のトレーニングを行う 1 年間の職員養成所、全国の児童福祉領域の職員研修機能、支援に生かすための実践的な調査・研究機能、地域の児童領域における相談・支援機能、関係機関との連携機能等が位置づけられています。中でも入所機能には、設立当時の理念が現在でも引き継がれ、数組の夫婦が重篤な非行化した少年 8 人程度に、家庭的な環境かつ行動化に対する一定の枠組みを提供しながらともに生活を行い、学

校教育、作業活動、クラブ活動などを通して、成長を促しています。

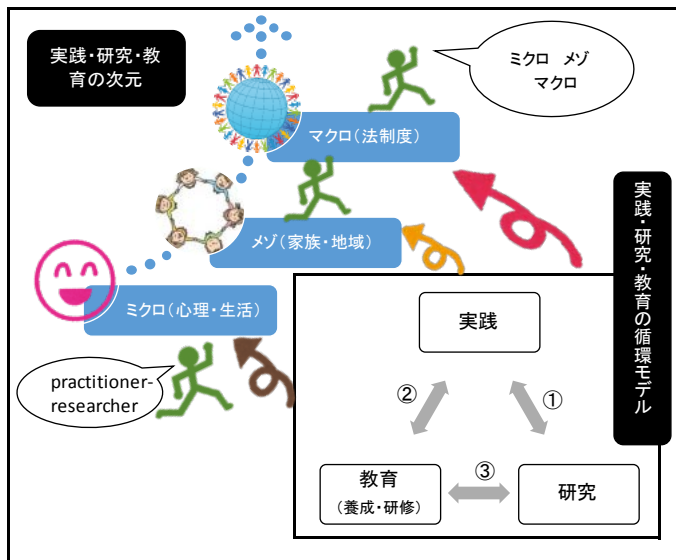
現在の入所児童にも 100 年前と共通した非行の背景が存在し、そうしたニーズに対応した働きかけの理念もまた 100 年前と変わらない点があります。一方で新たなニーズに対応し、エビデンスに基づく児童自立支援を展開していくこともこれからの時代には求められています。変わらない大切さと変わる大切さの間で今、101 年目を迎えようとしています。

○実践と研究と教育

さて、ここでは現在、私が仕事をする上で大切にしている基本的な考え方について説明をさせていただきます。それは実践と研究と教育をつないで、よりよい支援を行っていくことです。このような考え方の一部を説明してくれるのは practitioner-researcher model という考え方です。ソーシャルワークの分野では、課題中心アプローチで著名なウイリアム・リードという研究者が、「経験に基づく実践の動向」という論文の中で指摘したモデルです。すなわち、経験主義に基づく実践から、効果的な理論や方法を取り入れて実践し、また一方で自らの実践を評価・研究し、新たな知識や理論を創造していくタイプの実践者のあり方です。同様に臨床心理学の領域でも scientist practitioner model が提示されています。

さて、このような考え方と私の実践を図のように整理することができます。まずは、図の右下の「実践・研究・教育の循環モデル」についてです。図の①の実践と研究をつなぐ矢印は、よりよい実践に取り組むために最新の研究知見を学び支援に生かすこと、実践の取り組みを多くの人が参考にできるように研究としてまとめることです。図の②の実践と教

育をつなぐ矢印は、よりよい実践に取り組むために教育を受けること、実践の知見を研修によってフィードバックすることです。図の③の教育と研究をつなぐ矢印は、研究の知見を教育に生かすこと、教育に関する研究を行うことです。こうした実践と研究と教育の関係を循環的に取り組むことがよりよい支援を継続的に取り組むことにつながると考えています。



次に「実践と研究と教育の次元」についてです。これはマイクロ・メゾ・マクロの3つの次元に分類しました。まずマイクロ領域とは、支援を必要とする一人の対象者の心理面や日常生活に関連したニーズを示しています。次にメゾ領域とは家族や地域を示しています。この場合、一人の対象者を取り巻く家族や地域と家族や地域そのもののニーズという2つの視点を含んでいます。さらにマクロ領域はマイクロ・メゾ領域におけるニーズを含み、それらに対応する制度や政策を含んでいます。そしてマイクロ・メゾ・マクロの各領域は相互に関連し合い、ニーズを抱えた人への支援を行っています。



最後に、「実践・研究・教育の循環モデル」と「実践と研究と教育の次元」のつながりです。「実践・研究・教育の循環モ

デル」は、マイクロ・メゾ・マクロの実践の対象・次元でそれぞれ機能しています。そしてマイクロ・メゾ・マクロの領域間もつながっているため、循環モデルと対象の次元が歯車のようにかみ合った形で機能していくことが practitioner-researcher model の実践形態ではないかと考えています。

またこれによって社会福祉学、福祉心理学の学術的な発展がなされていくと考えています。

○福祉心理学・福祉心理士について

「心理学」は、多様な分野に分けることができ、その分野ごとに〇〇心理学という名称がつけられています。たとえば、臨床心理学、発達心理学、家族心理学、犯罪心理学などです。これらの〇〇の部分、後ろの「心理学」を修飾する関係になっています。「臨床」や「発達」は心理学の領域を示し、「家族」や「犯罪」は心理学の対象を示していると考えられます。このように、〇〇の部分によって、心理学の一つの分野を形成していると考えられます。では、「福祉心理学」はどうでしょうか。

私は「福祉心理学特論」の授業で暫定的に以下のような定義をしました。「福祉心理学は、①社会福祉領域における実践的な応用心理学の一領域でもあり、②社会福祉の価値や理念、法・制度および理論・支援と心理学における理論・支援を融合した実践的学問でもある。」

- ①は第一パラグラフ(〇〇心理学)の説明が該当します。
- ②は社会福祉学の考え方と心理学の考え方を融合することを示しています。②はさらに説明が必要になると思いますが、ひとまず①②により心理学の一分野だけではない要素も含んでいるのが、「福祉心理学」であると、整理をしておきたいと思います。

○大原天青先生のプロフィール

専門領域: ソーシャルワーク、福祉心理学、児童福祉

紹介: 非行領域における心理的支援と家族へのソーシャルワーク実践に取り組んでいます。practitioner-researcherを目指していますが、まだまだ十分に組み合わせていません。「感情や行動をコントロールできない子どもの理解と支援」金子書房(近刊)

メール: oharatakaharu@gmail.com

書籍の紹介

大西良編著の著書「貧困のなかにいる子どものソーシャルワーク」が平成30年9月30日に発行されました。近年、子どもたちが直面する生活の困窮の実態や貧困による不利の連鎖、いわゆる「子どもの貧困」問題に社会の注目が集まっております。こちらの著書では「社会問題としての子どもの貧困」に心理、福祉、教育などのさまざまな立場の方に協力をいただき制作されており、貧困によって生じる生活問題や子どものメンタルヘルス課題について、読者の方々に知っていただくきっかけとなる1冊となっております。



《詳細》

著書：貧困のなかにいる子どものソーシャルワーク

編著者：大西良

著者：「子どもの貧困」に向き合う人々

出版社：中央法規出版株式会社

平成30年9月30日発行

第1章 貧困のなかで生きる子どもたち

第2章 子どもの貧困とメンタルヘルス

第3章 子どもの未来へつなぐソーシャルワーク(11事例)

第4章 対話から汲み取る、思い、希望、夢

第5章 子どもの貧困対策～社会資源をつくる～

事務局からのお知らせ

2018年秋、初めての心理職の国家資格である公認心理師が誕生しました。これから、心理職の活躍が本格化していくのですね。社会において、心理職の重要性はますます増していくと思います。

福祉心理士会では、会員の皆さまの福祉心理支援の技能向上及び地域で福祉現場に携わる方たちの技能向上を図るための支援として、各地域で公開研究会・研修会を行っています。これらの研究会や研修会は、福祉・心理課題に関心のある関係者や一般住民の方々もご参加いただいています。福祉現場に携わる方だけでなく地域の方々にも福祉課題を知っていただいたり考えていただいたりして、福祉のまちづくりに貢献すべく活動しています。

【2018年度 全国大会】

日時 2018年12月9日(日)12:20～12:50(受付 12:00～)

場所 静岡大学 静岡キャンパス

【2018年度 公開研修会・研究会】

九州地区及び四国地区でも開催を予定しています。会の活動などを知っていただく良い機会ですので、ぜひご参加ください。

【公開研修会・研究会の募集】

事務局では、公開研修会・研究会を主宰して下さる会員を募集しています。ぜひ、ご応募ください。

これからも、会員の技能向上及び社会貢献のため、公開研究会・研修会を活性化していくべく努めてまいります。今後とも、会員の皆さまのご理解及びご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。